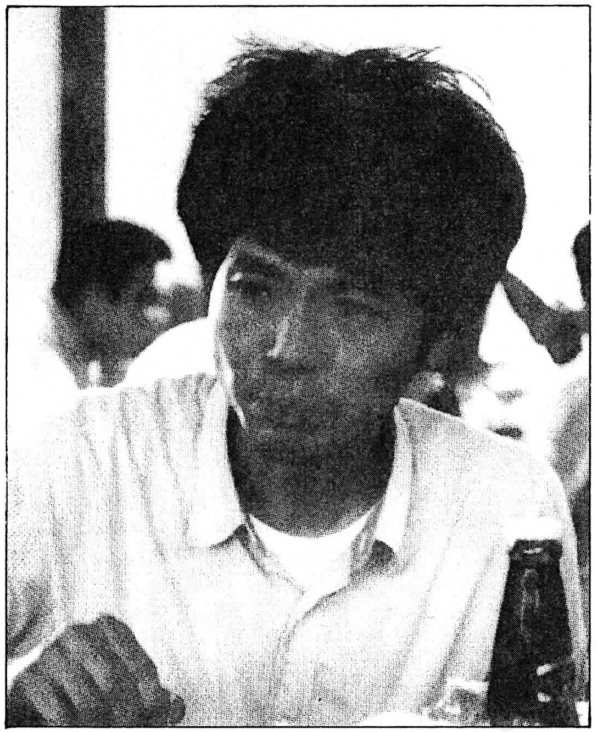
片田　幹雄　追悼

片田さんの思い出

泊　寛二（全港湾西成分会）



KATADA Mikio: 1952～2007

片田さんが亡くなってから、「寂しくなるねー」と何人かの人に声をかけられた。「今は忙しくてバタバタしているからねー、少し落ち着いて、暇になれば、そうかもねー」と答えている。片田さんが亡くなる前の日、あれは七月二七日（金）夕方だった。大阪・北浜の「エル大阪」八階、大阪府労働委員会の控え室にいたら片田さんがやってきた。暑い日だったので、電気もつけず薄暗い部屋の中で、私は椅子にひっくりかえっていた。大川弁護士事務所での打ち合わせが早く終わったからと言って、黒い重たそうなカバン二つを、ヨイショというように床に置いた。労働委員会が始まる前三〇分ほど、これからのことなどを話した。日雇い・建設下請け労働者がゼネコン・元請けを相手に団体交渉を求める、西成団交権の労働委員会が終わり、一階の喫茶店で話した。その日はいろんな事の展望が開けたり、解決のめどがたったりすることが多かったので、久しぶりに九月のスケジュールや、秋・冬の事まで話になった。闘争や会議日程に関する主

要な話も終わり、片田さんは九月に「労働・雇用状況と現在の労働運動」のようなことを発表するので、日を空けておいて聞きに来てくれと言い、私はその日が日曜日なので「かなわんなー」というような苦笑いをしながら日程をメモした。そして注文していた中古の宣伝カーが出来上がったので、車をいつ引き取りにいくか、になった。片田さんは業者に携帯電話をかけ、あくる日午後、私が取りに行くことが決まった。中国人研修生・実習生の労働相談を受けていたこともあり、片田さんは外国人労働者の問題を支援するNAW（ナウ）の集会に参加するため、六時以降も「エル大阪」に残ることになった。私がNAWの集会に出ずに帰ると聞くと意外そうで寂しそうな顔をした。片田さんが過労でへとへとになっているのが分かっていたので、早く家に帰るように言おうとしたが、仕事上帰れないと分かったので口にはださなかった。

私は、三〇日（月）午後三時、中国人の賃金・残業代に関する団交には参加すると言い、アルインコの会社前で合う事を約束して別れた。

二八日（土）午後、東大阪から宣伝カーで帰って来る途中だった。携帯電話が鳴った。「片田の息子です、父が今朝亡くなりました」と言うが、すぐには理解できなかった。昨日、片田さん本人が私の目の前で電話をし、車を取りに行くと言い、現に、その車にオレが乗っとるやんけー。「なんでや。どうなっとんや」という文句が何度も頭の中をかけめぐった。

とにかく、まず大阪・西成に車をもって帰らなければならない。車を何処かに預け、早く片田さんのところへいくべきか？　迷ったが、明日も明後日も忙しくなる、やはり運転して帰ろう。事故おこしそうやし、あぶないなー。体に緊張がはしり、ゆっくり走り、絶対安全運転を自分に命令して西成まで帰ってきた。

途中、安全のため、一切考えないことにしたが、体の緊張が昔を思い出させた。一九六九年四・二八沖縄闘争だった。反戦青年委員会の部隊で、東京駅手前の新幹線の線路になだれこんだ。学生・労働者で三〇〇人ぐらいはいただろう。しばらくは線路上を行進したが、すぐ機動隊がやってきて前後から挟み打ちになった。ほとんどの人は逮捕された。私は新幹線の高架の横に、電灯の鉄柱が伸びてきているのを見つけた。高架と鉄柱との距離は一・五～二メートル。鉄柱の太さは二〇センチぐらい。うまく飛びつけば逃げられる。失敗すると、下は一〇メートルはある。完全にケガをする。田舎の山で木登りで遊んでいた。一〇メートルぐらいの木で、枝から枝へ飛び移っていた。ガーンと、顔面が鉄柱にあたりダッコちゃんのように鉄柱にすがりついていた。私の後二～三人が続いた。墜落した人もいた。この頃の闘争は、歳がいき経験を重ねる中で批判的に総括しているが、片田さんが亡くなった知らせ、車の運転の中で全身の緊張が、同質・同類を検索するようにして引きずり出してきたものは、なぜだか鉄柱に飛びついた時の顔面の衝撃だった。片田さんと私が所属する労働組合・全港湾建設支部結成、

一ヶ月前の話である。

片田さんのことは一九七二年頃から知っていたと思う。京都の学生達が学生運動にとどまらず、労働運動に関心があると言う流れの中で会ったように思う。

一九七七年頃だった。大阪西成・津守の小さな町工場、大和製作所で働いていて首を切られ、西成分会大和製作所班をつくり解雇撤回闘争をはじめたのが出発だった。大学中退なのを隠していたとか、解雇の理由に「掃き溜めにツルだ」などと、今でも分かったようなわからんような、意味深いことを言われても闘った。片田さんの原点的な闘争だ。ほぼ一人で裁判闘争などもやりきり勝利的に解決させた。闘争の解決金で組合（西成分会）に支援のお礼をしたい。何がいいですか？　と聞きに来て、ビラの紙を切るカッターがガタガタで良くないのを見つけ、新しい良いカッターをお礼だとしてもってきた。そのカッターは今も組合事務所でB5の半ビラを作って働いている。

片田さんは実践も理論も出来る人だった。亡くなる二〇日ほど前、七月七日に「在日朝鮮人／日本人―その過去、現在、未来」を出版している。略歴を自分で書いている。一九五二年、大阪に生まれる。一九七四年、自動機械の製造工場にて全国金属労働組合の支部活動に参加。一九七七年、再就職後に解雇され、全日本港湾労働組合に加盟、解雇撤回闘争を闘う。一九八一年、全日本港湾労働組合関西地方建設支部西成分会で職員として専従活動に参加、現在に至る。二〇〇四年、建設支部書記長を兼任。本の末尾に経歴をさらりと書いていますが、片田さんはよく勉強している人だった。京都大学中退で、行政書士、社会保険労務士の資格も持っていたから当然ですけれど…。

私は歴史趣味と戦略・戦術学習もかねて戦史を読むが、日米ミッドウエー海戦のスプルーアンス艦長（日本で言えば山本五十六に対峙する人）がドイツ系でドイツ合理主義の人だと読んだ。当時、アメリカはナチス・ドイツと闘っており、ドイツ系とドイツ合理主義のコトバが引っかかり、アメリカ社会思想史を勉強することになった。数年前のことだ。大阪哲学学校の山本晴義校長の講義を聴いた。毎週土曜、昼から四時間ほど、一〇回ぐらいは聞いただろうか。その後のある日、五時過ぎに組合（西成分会）事務所を出て、西成の喫茶店・白木屋で話した。私が山本校長から真剣に仕入れてきた話を、片田さんはほとんど理解できるようで、ニコニコしながら聞いていて、私の話の足らないところの補足説明したり新しい解説を加えて話してくれた。これには驚いた。「なんでそんなこと知ってんねん」と言うと、高校時代アメリカにいたから…とサラリと言った。

居ただけでなく、その後もアメリカの社会と思想に注目し研究していたことを感じさせた。アメリカを政治・経済だけでなく社会思想史レベルからも見る必要を知っていた。

家族の人が言っていた。夜遅く帰っても、本を読んだり、調べものをしていたと言っていたが、そうだろうとおもう。公平な人で、いろんな人と接してもよく相手の人の話を聞き、できるだけ公平に

しようと努力していたと言っていた。会社から首切りされ、解雇撤回闘争を片田さんの指導で闘い勝利した労働者は「本当の勇気とは何かを教えてもらった」と語った。ある組合員は「左翼の人や運動している人は人の悪口や批判をよくするが、片田さんはそういうことは一切言わなかった」と語った。組合が主催したささやかな「偲ぶ会」での心に残る発言である。

片田さんの課題でもあり我々の課題でもある非正規労働者の組合とその運動はまだまだ未熟で前途多難だ。昔は「未組織の組織化」とかいっていた。グラムシの機動戦と陣地戦で言えば、陣地戦を重視する。ピラミッドのような整然たる体系でなく、太い大きな木の根っこが絡まり合う様な、生き物のような関係だ。合法的にドーンとしっかり存在し、できるだけ民主を実践し自治と協同の活動と関係を創ることだ。労働組合運動と労働者生産協同組合活動を統合させて進む課題は緒についたばかりだ。大企業や公務員の労働運動からは出てこない発想であり路線でもある。未知であり、これから切り開かれていく領域だろう。労働者自主管理、労務供給事業、わが組合・全港湾建設支部では、「自主運営分会」と言われ厳しい諸条件を切り開きながら生き抜き、前進しようとしている。その方向に、前途多難ではあるが片田さんの志もあった。

片田さん……、どういったらいいのだろう。「かくれた英雄」「地上の星」「一粒の麦地に落ちて死なずば…」いろんな言い方もあろうが、そのような表現では言えそうもない。片田さん……、私がほんとうに尊敬する人でした。

（二〇〇八年、一月三一日）

本村　四郎　追悼

本村四郎さん追悼

田畑　稔（本誌編集長）

本村さんと連絡が途絶えて久しく、「また入院したのかなあ」と思っていたが、あまりに長期になる。それで昨年八月、ひょっとしたら彼の著書の出版社なら事情がわかるかも知れないと思い電話した。そして白順社の江村信晴さんから、本村さんがすでに二〇〇六年一〇月九日午前一〇時半に東京両国の同愛記念病院で死去していたこと、遺体は火葬され遺骨は神戸在住の両親により引き取られたこと、をお教えいただいた。一九五三年生まれだから、まだ五三歳の若さ

追悼

泊　寛二
片田さんの思い出

田畑　稔
本村四郎さん追悼

論文など

藤田　隆正
経済的合理主義形成に果たした西ヨーロッパ中世都市の意義と役割
——マックス・ウェーバーの場合

大石　和雄
田畑氏の『マルクスと哲学』へのコメント
——「マルクス国家論の端初規定」を中心に

大藪　龍介
明治国家論（7）

エルネスト・ルナン／小原耕一訳
フランスにおける知的モラル的改革（下の1）

書評

木村　倫幸
加藤昌彦著
『水平社宣言起草者・西光万吉の戦後
—非暴力政策を掲げつづけて』

室伏　志畔
内倉武久著
『卑弥呼と神武が明かす古代』

定価1,200円

ISSN 0285-2993

季報『唯物論研究』
第103号
発行日2008年 2月29日

◆編集発行人
季報『唯物論研究』刊行会

◆編集委員
稲岡義朗
木村倫幸
捧堅二
笹田利光
高根英博
田畑稔（編集長）
服部健二
平等文博
松田博
丸山珪一
室伏志畔
やすいゆたか
山口協
山本晴義（代表）

◆編集・購読連絡先
〒560-0021
大阪府豊中市本町6-9-7-402
季報『唯物論研究』編集部
電話（ファックス共用）
06-6840-1056
Eメール
BZG20166@nifty.ne.jp

◆振替新番号
00990-4-25849

◆定期購読
一年（四号分）5,000円

◆印刷所
米川印刷所
三重県津市幸町5-2